

## MONO

いま世界の工場といわれるのは中国を  
 始めとするアジア東部に位置する国々だが  
 1950年代は日本がその役割を果たしていた。  
 カリモクもアメリカ向け輸出家具の  
 アーム部分の生産を手掛けていた時期がある。  
 多くの国産家具メーカーと同様に、こうして  
 同社も家具製造技術を身に付けていった。



### VOL.59 KARIMOKU SINCE1940~

●【カリモク】  
 Photo/Tomoaki Tsuruda(WPP)  
 KARIMOKU  
 Text/Teruhiko Doi



壊滅的な戦後の状況からわずか  
 20年足らずで奇跡的な復興を  
 果たした国、日本。  
 1960年前後から始まった  
 高度経済成長期は、  
 現代にも続くモノ作りニッポンの  
 足場が固まった時期でもあった。  
 経済の好転によって  
 人々の暮らし向きが変わり、  
 住まいや生活空間への  
 消費が盛んになったのも  
 この頃からの話。  
 最近では少なくなりましたが、  
 この頃建設された住宅の多くには  
 応接間があった。  
 いまはリビングにその機能が  
 集約されてしまったが、  
 当時の住宅で応接間を持つことは  
 ひとつのステータスであり、  
 その応接間にはしばしば、  
 瀟洒なデザインの  
 家具が置かれた。  
 豪華な家具ではなく  
 瀟洒な家具である。  
 日本人の中流意識を  
 代表するようなその価値観。  
 そこにピタリと嵌ったのが  
 『カリモク』の家具であった。  
 現在では「カリモク60」  
 というブランドに分類される  
 その家具たちは、  
 まさに戦後の日本が生んだ  
 モダンデザインの嚆矢となった  
 インテリアだったのである。



## MONO

ミシン台を始めとするさまざまな製品の  
木部製造や、海外向け家具のパーツ作り  
などからスタートした同社が、初めて  
自社ブランド製品を発表した数年後の  
1964年に「カリモク家具販売株式会社」  
が設立された。その後、国内に  
カリモクの家具が広まっていくことに。



輸出向けの家具の中から  
最もシンプルなものを選び、  
それを日本の住宅に合わせて改良。  
こうして初の自社製品として誕生したのが  
現在のカリモク60ブランドの代表アイテム  
「Kチェア」だった。カリモクという

ブランドが誕生した瞬間でもある。  
この椅子は、国産家具の中でも  
特筆すべきロングセラーを誇っている。  
カリモクニュースタンダードなど  
海外でも注目を集める新作家具と共に  
現在もこの製品は継続されている。



カリモク60「Kチェア1シーター」  
価格3万2550円

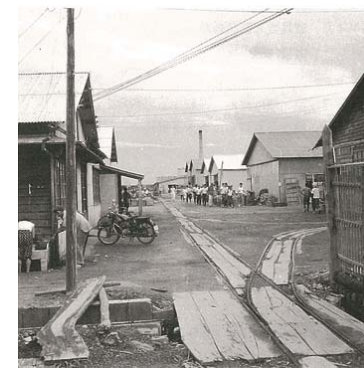


## MONO

安全な家具作りを第一に考えるカリモク。日本人の体形や生活スタイルなどに合わせた製品開発に主眼を置き、実使用の中で「使いやすい」という声が多方面から聞こえてくる。また環境に配慮した材料の選別から廃棄物の燃料化まで、その企業姿勢も高く評価されている。



「きれいな場所でないといいモノはできない」という信念を持つ同社工場内で撮影された、KARI MOKUブランドの肘付食堂椅子。インハウスデザイナー、永田氏のデザインであり「日本の木の椅子～明治から近代・現代までの108脚／別冊商店建築(78)」に選ばれた一脚。花梨を使ったタイプ。価格8万6100円。  
※現在この素材での製造は終了



戦後間もない時代の刈谷木工所の風景。家具製造の基礎的なスキルを、さまざまな木部品製造から学んでいった勤勉な会社。

## カリモクの家具が 応接間にあつた昭和は モダンな時代だった



愛知県刈谷市。日本を代表する製造業、自動車メーカーのトヨタ・グループに関連する主要企業の本社や工場が集まる、日本有数の自動車工業都市。もともとトヨタは1930年代に豊田自動織機の一

部門(自動車部)が独立したものであり、母体は繊維を織る自動織布機の会社であった。1940年、刈谷木工所(現在のカリモク)という会社が創業する。創業者の加藤正平は江戸時代から続く木材屋を継いで木工所を設立。しかしすぐに第二次世界大戦に突入

めの製造を命じられる。刈谷木工所も鉄砲の銃床や弾薬箱などを製造した。終戦を迎えると同時に軍需品の生産はなくなり、新しい生産品目を模索して下駄から大車まで、さまざまな木製品を製造したという。やがてトヨタ傘下で木部品の製造を開始。紡績機の木部品や輸出用梱包箱などを作っていた。1950年代に入ると、高度な技術を要するミシンのテーブル製造を手がけ、輸出家具のアーム部分の生産などを開始。ところが1959年に歴史的な災害として記憶される伊勢湾台風で同社工場が壊滅的な被害を受ける。会社存続の危機的状況にまで陥ったが、何とかなって直しを図り、60年代の高度経済成長期を迎えた。この頃から消費文化を代表するようなテレビやステレオの木製キャビネット製造の注文が増えた。ミリ単位の木工技術をこれぞ磨いた同社は、やがてピアノの鍵盤とアクションの製造を受注。今度はミクロ単位の仕事となり、企業としての基礎体力を技術革新で付けていった。そして1962年にいよいよ自社生産による家具製造を開始。「自分たちのブランドを持ちたい」という強い願いから生まれた最初の製品が現在の「Kチェア」であった。1964年に「カリモク家具販売株式会社」がスタート。

全国的に家具の販売を開始し、1967年にはカリモク60ブランドのカフェチエアが誕生。昭和の喫茶店文化を語る上で欠かせない、座り心地のいいカフェチエアだった。その後次々とラインナップを充実させていき、中には、当時爆発的な普及を果たしつづつあった家庭用電話機を設置するための電話台などもあった。70年代には本社にショールームもオープンし、カリモクの家具はその地位を不動のものとする。ちなみに、昭和から平成に時代を移した80年代後半から90年代にかけて、ビックコミックス・ピリッツで連載されていた人気ラブコメ漫画「ツルモク独身寮(作・窪之内英策)」は、作者の同社での寮生活を題材にした作品だった。バブルの盛衰を経て90年代半ばごろからカリモクの60年代製品の再評価がなされ始め、2002年に「カリモク60」のブランドがスタート。これは1960年代に生まれた同社製家具の中から、最も普遍的なデザインを選び抜き、廃番となってしまった製品も新たに復刻を果たした。2010年にはデザイン性の高い「カリモクニュースタンド」を発表。世界的な評価が高まる。高級ラインの「ドマニ」も含めて、カリモクは日本を代表する家具ブランドの地位を築いている。

マレーシアのゴムの木の再利用など、環境に配慮した原材料を積極的に採用する同社の姿勢は、高く評価されている。



↑細部に職人技が光るカリモクの家具。  
←カリモク60/Kチェア2シーター。この懐かしさも普遍的な形は見事だ。スタンダードブラック価格5万1450円。



カリモクという企業を存続の危機に陥れた、1959年(昭和34年)の伊勢湾台風。明治以降の台風による最大級の災害である。この瓦礫の中から同社は復興を果たす。



高い木工技術が要求されたミシンの製造はカリモクの転機となった仕事。洗濯機や冷蔵庫、掃除機などと並び、ミシンも家庭の主婦たちが欲しいと思う製品の上位だった。



# STYLING



刈谷木工所(現カリモク)  
創業者の加藤正平。

## MONO

カリモク製品に関する  
お問い合わせは  
☎0562-83-1111  
<http://www.karimoku.co.jp/>



カリモク60/Dチェア スタンダード  
ブラック。価格3万8850円



カリモク60/ロビーチェア1シーター  
スタンダードブラック。価格5万400円



カリモク60/ロビーチェア3シーター  
モケットグリーン。価格11万1300円



カリモク60/テーブル ウォールナット  
価格3万8850円(大)、2万4150円(小)



カリモク60/フレームチェア3シーター  
マスタードイエロー。価格15万4140円



カリモク60/サイドボード オーク  
価格17万6400円